

氏 名	趙 訐僊	
学位の種類	博士（美術）	
学位記番号	博美第36号	
学位授与年月日	令和6年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者	
題 目	学位論文題目	実体と空間－立体造形表現における「留白」の運用－
	研究作品題目	作品1. 「留白」について－造像 作品2. 「留白」について－風が立つNO.1 作品3. 「留白」について－風が立つNO.2 作品4. 「留白」について－雨の間
論文審査委員	主 査 教授 神田 每実 副 査 教授 佐藤 直樹 副 査 准教授 竹内 孝和 外 部 茨城県天心記念五浦美術館 審査委員 館長（分館長） 小泉 晋弥	

## 1 学位論文の要旨

本研究は、東洋絵画における「留白」という水墨画表現手法に注目し、その表現手法を立体造形表現に運用することで、抑制された造形行為によって、より可能性の開かれた表現を実現するとともに、立体造形表現における、「実体」と「空間」の関係について実証的に考察しようとするものである。

本論の第1章では、まず「留白」という言葉の解釈、言葉の使われ方について考察し、「留白」は中国伝統絵画における表現手法をさす美術用語であることを確認した。そして、この表現手法は、直接的な表現をさけることが重んじられ、「“虚”（造型されない部分）が“実”（造型される部分）に取ってかわることで、観賞者に無限の想像力をかきたてる効果がある」手法であることを明確にし、その上で、「留白」の表現の多義性・不確定性・重層性・増殖性などの特徴を確認した。

更に、日本における「余白」という言葉の解釈、位置付け、及び「留白」との関係を考察した。それによって本論における「留白」を明確化し、美術用語として位置付け、更に、立体造形への運用に役立つと考えられ、「留白」と「余白」の継承関係を確認し、動詞と名詞としての違い、更に日本文化の特性によるものと結論づけた。更に、「留白」の表現を裏付ける現代芸術論、ウンベルト・エーコの「開かれた作品」の理論について考察し、「開かれた作品」には「作者とともに作品を作ることへの誘いによって特徴づけられる開かれた作品」と「観賞者が刺激の総体を知覚する行為において、作品から様々な関係を自ら発見し、無限な可能性を生み出す開かれた作品」の二つのパターンが存在することを確認した。

以上の考察した内容に基づいて、立体造形作品における「留白」の表現について論じた。「留白」の「虚と実」の基本原理を、「空間と実体」の関係として捉え、そして、視覚的な刺激要素の配置を視覚的な刺激要素のインスタレーションによってこれに取り組もうとす

るものとして考えた、立体造形作品における「留白」の表現では、空間に視覚的な刺激要素としての実体の配置によって、多様な関係、可能性を生じさせる「場」、「知覚環境」を生成させることと定義した。

次に、「留白」の具体的な運用方法、及び立体造形作品における運用の可能性の確認のため、本論では「留白」の表現を以下の三つのパターンにまとめた。

#### 一、何かを想像させる「留白」の表現

観賞者に特定の事象及び、その内容を想像させるための暗示を与える役割を持つ留白である。

#### 二、可能性を生み出す関係としての「留白」の表現

刺激要素の配置によって多様な相互関係を生じさせる留白の表現。

#### 三、抽象的作用としての「留白」の表現

刺激要素の明確な相貌、個別的な主張、説明的な描写を捨て去ることによって、観賞者に無限な解釈の可能性を与える表現。

第2章では以上の三つのパターンの「留白」の表現を応用したと考えられる作例（水墨画の作例、絵画以外の作例、現代美術の作例）として整理した。

#### 一、何かを想像させる「留白」の表現

（牧谿の《遠浦帰帆図》、仏足石、高松 次郎の“影” シリーズ）

#### 二、可能性を生み出す関係としての「留白」の表現

（八大山人の《魚石図》、「磐座」、李 禹煥の“関係項” シリーズ）

#### 三、抽象的作用としての「留白」の表現

（梁楷の《李白今行図軸》、松尾芭蕉の俳句、河原 温の“Today” シリーズ）

作例を通して、「留白」の表現手法の機能、効果、応用の方法を検討し、第1章で考察した内容を再確認した。

第3章では、第1章、第2章の研究において提示され、確認された、「何かを想像させる留白の表現」のパターンに基づいて制作された《「留白」について－造像》、「可能性を生み出す関係としての留白の表現」のパターンに基づいて制作された《「留白」について－風が立つ NO.1・NO.2》、「抽象的作用としての留白の表現」のパターンに基づいて制作された《「留白」について－雨の間》の4つの作品について、それぞれのパターンの特徴、性格などを示しながら構造的に解説し、第1章と第2章において示した研究の有効性について検証した。

「留白」の表現手法を立体造形表現に運用して、立体造形作品でも「留白」の表現手法は、観賞者の参与を求め、不確定性を付与された刺激の配置によって、観る者に常に変化する不確定な観賞を誘うことを目指した。それによって、作品に無限性を与える可能性があることを自作の表現に応用することでその有用性の確認を行なった。

## 2 学位論文審査の要旨

### 【論文】

趙 訢偲により執筆・提出された博士号申請論文《実体と空間－立体造形表現における「留白」の運用－》は、序論、三つの章による本論、結論により構成されている。趙は、序論において、先ず、宋代において確立されたとされる「留白」という東洋絵画に見る表現手法の、立体造形表現における運用の可能性と効果、方法、及び「実体」と「空間」の関

係について実証的に考察するという本研究の目的と、論を構成する第1章、第2章、第3章での考察の内容・目的について概説している。

第1章では、本研究のキーワードである「留白（りゅうはく）」の概念について中国美術に関する文献に基づいてあきらかにし、続いて、日本における「余白（よはく）」の概念についての解釈、位置づけ、及び留白との関係を、余白に関する先行研究を参照した考察によりあきらかにした。更に、留白の表現を裏付ける現代芸術論である『開かれた作品』（ウンベルト エーコ著）の理論について考察することで、「開かれた作品」には、「作者とともに作品を作ることへの誘いによって特徴づけられる開かれた作品」と「観賞者が刺激の総体を知覚する行為において、作品から様々な関係を自ら発見し、無限な可能性を生み出す開かれた作品」の二つのパターンが存在することを確認している。

そしてこの章の終わりに、立体造形表現における留白の表現の原理や構造について論じ、留白の表現の具体的な応用方法、及び立体造形表現における応用の可能性の確認を目途として、留白の表現を、①「何かを想像させる留白の表現」②「可能性を生み出す関係としての留白の表現」③「抽象的作用としての留白の表現」という三つのパターンに分類している。

「立体造形表現における留白」についての先行研究は、趙によるこれまでの調査においては確認されていない。そのため「立体造形表現における留白」の概念を構築することを目途とする第1章は、本論文で大きな比重を占めるものとなった。古典絵画手法の立体造形表現における運用に関する考察、現代芸術論に対する考察、それらに基づく「留白」のパターン化の試みがなされた展開は、高い専門性、独創性、国際性を示すことができた。

第2章では、第1章で分類した三つのパターンに、本研究における留白の表現で説明することが出来る作品を①水墨画の作例②絵画以外の作例③現代美術の作例として整理し、それらの作例研究をとおして、留白という表現手法の具体的な機能、効果、及び応用の方法などを検討した。この検討によって、第1章における理論的な研究内容について、実際の造形における応用の可能性と具体的な表現方法の確認をすることができた。

第3章では①「何かを想像させる留白の表現」②「可能性を生み出す関係としての留白の表現」③「抽象的作用としての留白の表現」の三つのパターンに基づいて制作された4作品を論じた。具体的には、①には、作品1.《「留白」について－造像》、②には、作品2.《「留白」について－風が立つNO.1》・作品3.《「留白」について－風が立つNo.2》、③には、作品4.《「留白」について－雨の間》が対応する。それぞれのパターンの特徴、性格などを示しながら構造的に解説し、第1章と第2章において示した研究の有効性について検証した。

結論では、本論を構成する各章における検証と成果をまとめ、立体造形表現における「留白」の運用の有用性について、留白の表現は鑑賞者の参与を求める表現手法であり、多義性、不確定性、重層性、増殖性などの特徴があり、作品に鑑賞者の想像力を開く可能性、超越性、無限性を与える手法であるということを述べた。

## 【作品】

論文の第2章で取り上げた作例についての研究を参照しながら、「何かを想像させる留白

の表現」のパターンとして、光背と蓮座、雲座の構成によって、超越的な存在を暗示し、想像させる作品 1. 《「留白」について—造像》を制作した。また、「可能性を生み出す関係としての留白の表現」のパターンとして、空気の流れをイメージし制作した造形物を空間に複数配置することによって、観賞者の能動的精神活動を喚起する環境の生成を目指して作品 2. 《「留白」について—風が立つ No. 1》を制作した。加えて作品に対して、更に次元を超える開かれた可能性を与えるため、空気の流れをイメージし制作した立体造形物と二次元的な白いパネルとの配置を試みた作品 3. 《「留白」について—風が立つ No. 2》を制作した。最後に、「抽象的作用としての留白」の表現のパターンとして、俳句の創作方法に基づいて、雨粒というモチーフが象徴的に示す時空間的要素を、雨の跡としてコンクリートの薄い板一枚に圧縮して定着させた作品 4. 《「留白」について—雨の間》を制作した。

提出された作品は、趙が、極めて論理的に問題を抽出し、解決しながら制作を行ってきたことをうかがわせるものであり、特に、作品 4. は、具体的な継承を排除した抽象的造形となっているにもかかわらず、優れた叙情性を生むことに成功している。

《雨の間》は、俳句を発句として、連綿と読み手がつなげていく連歌のような構造を実現している。それまでの作品のモチーフである雲が、地上へと落すのが雨であることを思えば、具体的に表わされていない雲までも暗示しているといえる。ランダムに降り注いでいると思われた雨滴が、限られた時間の中では、それぞれ異なった様相を示していることが確認できる。作者が主張する「無秩序を留める秩序」として、60センチ角というミニマルなベースと数分という時空間のコントロールは、まさに必要最小限の作為によって、無限の豊かさにつながったといえるだろう。[註 6 3]

本論中より引用した上記、作品 4. に対するこの評価は、当該作品の秀逸さについて述べたものであると同時に、趙が、留白をキーワードとした本研究において明らかにした個々のパターンが、それぞれの特徴、性格を保持しつつ連鎖しながら無限の想像の生成を導く作品を出現させていることを示すものである。勿論、その前提には、様々な素材に対する様々な実験に裏打ちされた、時に過剰かとも思われる極めて高く巧みな技術と造形力が存在していることも当然のこととして見逃すことが出来ない。

#### 【口頭発表】

2024年1月19日(金)、14時30分より、愛知県立芸術大学講義棟第4講義室において、博士号申請者である趙 評僊に対し、発表30分、質疑応答20分の口頭発表を課した。

趙は、自身の研究について、自身の作成したパワーポイントを用いて発表を試みた。パワーポイントの構成は、論文の要旨に基づくもので、必要に応じて本論を参照しながら進められるものであったが、自作を参照しながらの、立体造形表現における留白の運用についての説明については、論文の内容、作品の内容の密度、充実度に比べると淡泊な印象を残すものとなった。発表の後、審査を担当する小泉晋弥外部審査員からは、先に記した、発表自体についての指摘と、本論中において取り上げられている、先行研究、及びその引用部分についての質問、定義等についての確認がなされ、佐藤直樹審査員からは、立体造

形表現における留白についての強い言及の必要性、竹内孝和審査員からは、作品を構成する造形物の数と本論に付されたカタログに記載された造形物の数との差異に関する質問と表記に関する指摘が、また神田審査員からは、中国と日本における留白と余白の係に類する構造が、東洋美術といゆる西洋美術において存在する可能性の有無についての見解が求められるなど、本論における記述や展示された作品を前提とした質問、指摘がなされ、趙はこれらについて自身の論を踏まえて口答した。

趙 評僣による研究、及びその成果に基づき執筆・提出された博士号申請論文《実体と空間－立体造形表現における「留白」の運用－》は、造形表現の成立に関わる基本的構造を明らかにし、その構造を創作において応用することで有用性とその効果、有用性を確認しようとするものであり、基本的な課題についての取り組みであるがゆえに普遍的な研究である。立体造形表現における留白、及びその応用についての先行研究は、現時点において見当たらず、それ故に本研究は、ディプロマポリシーに示された要件である、Ⅰ：専門分野において高度な研究内容であること Ⅱ：独創的な研究であること Ⅲ：当該研究が国際的に貢献できること の全てを自ずと満たすものである。趙 評僣は、提出された博士号申請論文及び、その論述の基づく創作による作品において、自身の研究とその成果が博士の基準を満たすことを示した。

### 3 最終試験結果の要旨

2024年1月19日、論文、作品、口頭発表等に基づき、博士号学位申請者 趙 評僣に対して、口頭試問を実施した。

最終試験において、趙は、小泉晋弥外部審査員、主査神田每実審査員、副査佐藤直樹審査員、同竹内孝和審査員による、論文、作品、口頭発表等に基づいて課された口頭試問において、最終試験に先立って行われた口頭発表における質疑と応答、及び指摘を前提とした自身の研究成果に基づきながら、真摯で論理的な回答を行った。また、趙により示された一連の対応と態度は、趙が、課程博士の課程における5年に及ぶ研究を通して、研究者として備える必要がある研究や思考の方法、学問に対する謙虚さ等を十分に体得していること、本質的で継続性を内在する課題の獲得に至ったことを示すものであった。

#### 評価

論理的考察とそれらに基づく実験、創作、及びこの後に続く新たな課題についての認識と理解。先行研究が見当たらない状況の中で取り組まれた本研究を、趙に博士の学位を与えるに十分な内容と成果を示すものであると判断した。また、そのことを一度認めた上で、口頭発表や、最終試験において指摘された先行研究の引用部分や、作品4についての自己批評を今少し充実させること、散見される日本語文法上の祖語、論文の表記上の祖語に修正を施すことを条件として、趙 評僣による博士号申請論文“実態と空間－立体造形表現における「留白」の運用－”を論文として公開に値するものとする結論した。